

追悼

亀井節夫先生のご逝去を悼む

神谷英利

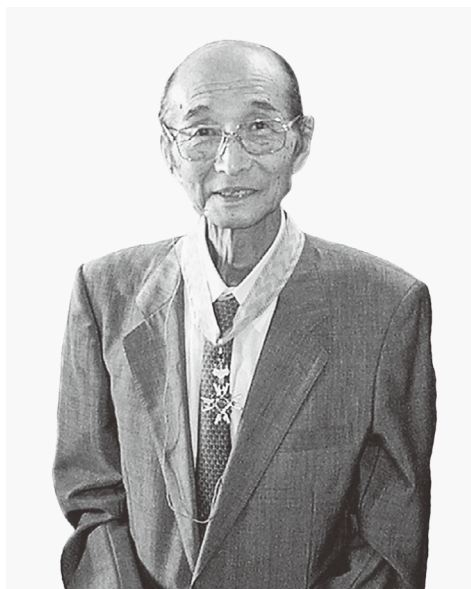


写真. 瑞宝中綬章を受章された時 (2006年春).

本会名誉会員・京都大学名誉教授の亀井節夫（かめいただお）先生はかねてより療養中のところ、2014年5月23日に逝去されました。88歳でした。心から哀悼の意をささげます。

亀井先生は1925年（大正14年）、神奈川県鎌倉市で出生された。ご父君は海軍士官であり、長崎県大村、佐世保、茨城県土浦（霞ヶ浦）など何回かの転勤があったので、幼稚園や小学校も変わることがあったが、1937年に神奈川県立湘南中学校（旧制）に入学、1943年に同校を卒業後、北海道帝国大学予科理類に入学された。時はまさに戦時中で、学業以外に工場建設や北見での援農作業に従事されたとのことで、それがもとで体調を崩し、鎌倉の自宅で療養されたこともあった。また、1944年には海軍の航空司令であったご父君がグアム島で戦死されるというご不幸に遭われている。

1945年3月に予科理類の課程を修了し、北海道帝国大学理学部に入学、地質学鉱物学を専攻した。これが先生が地質学の道に入られた最初であり、第二講座（地史学）で大石三郎教授や湊正雄助教授の指導を受けたが、翌年には北海道大学を退学し、東京大学理学部地質学教室に入学された。

東京大学の地質学教室では第二講座に所属して、卒業論文で飛騨山地の福地地域に分布するシルル系、デボン

系を含む古生層の研究を行ったが、これ以降、飛騨山地の古生層の研究が主要な研究テーマとなった。1949年に東京大学を卒業され、翌1950年3月に新制大学として誕生した信州大学文理学部に助手として赴任された（自然科学科地質学教室）。以前、先生に伺ったお話では、新たに発足した新制大学である信州大学（旧制松本高等学校）で、助手と言う役職（身分）がよく理解されず、教室内の掃除をさせられたこともあったそうである。

信州大学赴任後も引き続き、飛騨山地の古生層の研究を進められたが、1955年ごろから主要な研究テーマを脊椎動物化石の研究に移されることとなった。古生層から脊椎動物化石の研究への転換で、非常に大きなテーマの変更であるが、テーマを変えられた経緯については残念ながら詳しくは存じ上げない。もちろん、いろいろな方のご助言があつてのことであろうが、まったく異なる新しい分野に進むについては、大変なご苦労があつたに違いないことは容易に推察できる。しかしながら、同年には早くも井尻正二先生とともにサハリン産のデスモスチルス（気屯標本）と岐阜県産のパレオパラドキシアの研究を実施されている。

古脊椎動物学の勉強と研究とあわせて、先生はそれまで進めて来られた、飛騨山地の古生層の研究をまとめて学位論文を作成し、1961年7月には「日本列島のデボン系の研究」により、北海道大学から理学博士の学位を授与された。

信州大学では1956年10月に講師となり、1962年8月に助教授に昇任され、翌1963年12月に京都大学理学部に移り、地質学鉱物学教室の地史学講座の助教授として、第四紀および脊椎動物化石の研究を担当されることとなった。京都大学の地質学鉱物学教室は、横山次郎先生による静岡県佐浜産のナウマンゾウの模式標本をはじめとして、長鼻類化石の研究の実績のある教室であり、哺乳類を主とする脊椎動物化石にテーマを転換された亀井先生にとって、大変良い条件を備えているところであったと思う。実際、このあと、脊椎動物化石の研究を志す多くの学生が、先生の研究室に集うことになるが、その出発点がこの年であったと言うことが出来よう。京都大学に移った翌年の1964年には、さっそくと言うように、大阪・豊中市の大阪大学の工事現場から巨大なワニの化石が発見された。先生は共同で研究を行い、骨格の復元を行った。これが現在でも近畿の代表的なワニ化石となっているマチカネワニである。1966年には松下進教授の後を受けて、地史学講座の教授に昇任され、ここに古脊椎動物学を中心的な研究課題とする「亀井研究室」が確立したのである。京都大学のみならず、ほかの大学からも、脊椎動物化石の研究を志す学生たちが、大学院生としてこの研究室に集まり、この分野におけるその後の研究を発展させる多数の人材が育って行った。

1986年には京都大学評議員に選出され、大学の運営に尽力された(任期2年)ほか、日本地質学会評議員、日本古生物学会評議員、日本第四紀学会評議員・会長など諸学会の役員を歴任され、学会活動の発展にも寄与された。1989年3月末で京都大学を定年退官され、引き続き、4月より信州大学理学部教授として、2年間教育・研究に当たられた。信州大学退官後は、徳島県立博物館に館長として招かれて、1999年3月まで在任されるなど、多方面でご尽力された。先生のこれら一連の活動・貢献に対して、2006年春の叙勲で、瑞宝中綬章が授与されたのである(写真)。

ここまで、亀井先生のご活動について概略を紹介させていただいたが、次にもう少し具体的な点について紹介させていただくことにしたい。亀井先生の主要な研究領域は、「古脊椎動物学」であるが、その中でも哺乳類化石が主たる研究対象であった。前述のように、京都大学では、戦前に榎山次郎教授により日本の長鼻類化石の研究がおこなわれ、多くの長鼻類化石標本が所蔵されていた。これには外国産の標本も多く含まれ、当時の日本の研究機関では他に類のない貴重なコレクションであった。亀井先生が長鼻類化石を研究の主な対象にされたことは自然の流れであったと言える。

1969年に北海道忠類村でほぼ完全なナウマンゾウの化石が発見された。翌年夏に集団的な大発掘が実施されたが、亀井先生は調査団の団長として、この発掘を指揮された。筆者は当時、東京教育大学(地質学鉱物学教室)の大学院博士課程に在籍していたが、この発掘に参加する機会を得て、勇躍、はるばる十勝の地におもむいて、ひたすら泥炭質の泥岩層に埋まるゾウの骨を掘った。最終日には、発掘現場で亀井先生の発声によりコップ酒で打ち上げの乾杯をしたことが最近のことにように鮮明に思い出される。そして、これが亀井先生とじかにお会いした最初であった。のちに先生と同じ講座の人間になろうとは、まったく、想像もつかないことだった。この時発掘されたナウマンゾウの骨格は、亀井先生らによって復元された。その復元骨格はキバの長さが2m近くになる堂々たる体型で、ナウマンゾウ復元像の代表的なものとして、日本各地の博物館にレプリカが展示されている。

ナウマンゾウと言えば、長野県野尻湖畔における長年にわたる発掘調査で発見されたものが有名であるが、亀井先生はこの発掘が始まった1962年から調査に参加しておられる。野尻湖における発掘調査は、野尻湖発掘調査団によって、今年までに20回実施され、専門家に限らず、一般の人たちも含めて、大勢が参加して行われてきた。たとえば、1975年の第6次発掘での参加者は3,652名、1978年の第7次発掘では2,897名(野尻湖ナウマンゾウ博物館HPによる)ときわめて多数で、マスコミでは「大衆集団発掘」などと呼ばれた。亀井先生は1978年から1988年まで10年以上にわたって、調査団団長を務めら

れた。

野尻湖発掘調査では、ナウマンゾウやオオツノシカをはじめとする多数の哺乳類化石が発掘され、ナウマンゾウの形態学的研究が大いに進んだだけでなく、氷河時代後期における日本列島の自然環境を明らかにする研究も飛躍的に発展した。それらの成果をもとに、1984年7月に地元の信濃町野尻に「野尻湖博物館」(現、野尻湖ナウマンゾウ博物館)が開館した。亀井先生はこの博物館の設立にあたって、調査団団長およびナウマンゾウをはじめとする哺乳類化石の研究者の立場から力を尽くされた。地域で得られた研究成果は地元にお返しする、と言う「地元主義」に基づくものである。

なお、ナウマンゾウの分類については、模式標本を研究した榎山次郎先生は、インドのナルバダゾウ *Elephas namadicus* の亜種として *Elephas namadicus naumanni* としたが、その後、何人かの研究者により、異なった見解が出されて来た。亀井先生は野尻湖産の標本の研究をもとに、*Elephas naumanni* を提唱された。その後も議論があり、現在は周知のように *Palaeoloxodon naumanni* (Makiyama) となっている。

先生は長鼻類化石については、ナウマンゾウに限らず、近畿地方から比較的多く発見されるステゴドン類 *Stegodon* の研究も精力的に進められた。ステゴドンは日本では鮮新世から更新世中期の地層から発見される長鼻類で、日本列島と大陸との関わりを知る上でも重要なものである。従来、アカシゾウ、スギヤマゾウ、アケボノゾウ、トウヨウゾウなどいくつかの種名が報告されていたが、はっきりとした基準が知られておらず、その整理を行う必要があった。亀井先生は研究室の院生らと共同で、この問題に取り組まれた。現在、アカシゾウ、スギヤマゾウはアケボノゾウにまとめられている。また、分類に混乱のあったシガゾウに代表されるムカシマンモスのグループについても検討を進められ、新たな見解を提唱されている。

「ゾウの化石」と並び、亀井先生を中心とする滋賀県野洲川河床の古琵琶湖層群の足跡化石の研究は、日本の足跡化石の研究史にそれこそ大きな「足跡」を残したと言える。1988年8月、日常的に地域の地質の調査をしておられた田村幹夫さん(当時、県立高校教員)が滋賀県甲西町(当時、現在は湖南市)の野洲川河床に分布する古琵琶湖層群の地層面に、多数の動物化石の足跡を発見された。連絡を受けた亀井先生や院生諸君、さらに当時すでに地史学講座に在籍していた私などが現場に駆けつけ、非常に保存のよい長鼻類や偶蹄類の足跡化石多数を確認した。今まで、日本のどこからもこのような立派な足跡化石は発見されていないし、外国の産出例と比較しても、見事な保存状況であった。

発掘調査は京都大学、甲西町、滋賀県の三者からなる野洲川足跡化石調査団が行うこととなって、亀井先生が

団長、私が事務局長を務め、1988年9月から12月にかけて実施した。発見と調査のニュースは日本中を駆け巡り、「ありとあらゆる」ほとんどのメディアが競って報道した。テレビ、ラジオ、新聞はもとより、女性週刊誌やあやしげな週刊誌までが大きく取り上げた。化石の発見と調査のニュースがこれほど大々的に取り上げられたのは、日本の古生物学研究史上、空前絶後のことであった。なぜこれ程、広く取り上げられたのか、今考えると不思議であるが、団長の亀井先生が苦勞しながらメディアに誠実に対応されたことも一因であろう。見学者も多く、なかには観光旅行の途中にバスで乗り付けて、見学を希望する団体もいるほどで、事務局長であった筆者は見学者への対応と、発掘現場の保守で大変だった。

その頃、建設準備段階だった滋賀県立琵琶湖博物館の展示用に、発掘現場の主要部分の全面型取りと地層のままの切り取り作業を行ったため、予想外に時間がかかり、ひととおりの調査が終わったのは、その年の12月はじめ頃だった。私はほとんど毎日京都から現場に赴いて、調査の「監督」と調査区域の保守にあたったが、河原の風は寒く作業はきびしかったことが、今更のように思い出される。調査は翌1989年にも行われ、その成果は「琵琶湖博物館開設準備室報告」にまとめられたほか、1991年に中国・北京で開催された第13回国際第四紀学連合学会(INQUA Congress)で発表され、大きな関心呼んだ。

野洲川の足跡化石の研究ののち、日本の各地でいろいろな動物の足跡化石が発見され、この分野への関心が一気に高まったが、亀井先生はこの点でも大きな貢献をされたと言える。

亀井先生の研究は手法的には伝統的な形態学が主であったが、また、同時に常に先端的なことも考えておられた。1982年には日本各地に所蔵されている脊椎動物化石標本の研究の便を図るため、標本データベースを構築する構想を固め、研究室のメンバーを中心に、まず、

京都大学所蔵の標本について、電算化を開始された。1986年には京都大学大型計算機センターから一般公開するまでにこぎつけた。これが「在日本脊椎動物化石データベース:JAFOV」であり、その後も科研費の補助を得ながら、他機関所蔵の標本についても入力作業が進められた。先生の京都大学退官後も構築作業は続けられ、現在の登録数は17,000件を超えていて、日本における化石標本のデータベースの先駆的な取り組みとして特記されるものである。なお、本データベースは、2014年6月から東京大学総合研究博物館と産業技術総合研究所地質標本館に移管され、引き続きWeb上で一般に公開されている。

亀井先生は江戸時代の津和野藩主のお血筋で、院生たちは先生を時には「殿様」と呼んだりしていた。時と場合によって、いろいろな意味に使っていたのだが、ご本人はその通り、誠実で、潔白なお人柄だった。あまり余計な事をしゃべることはなく寡黙で、ゼミの時なども会話が続き学生が困ることもあったが、話をされる時には、実に丁寧な話し方をされ、目下の者や場合によっては、学生にも敬語が使われることがあった。ある時、学生向けの受講案内にまで敬語が並んでいたもので、さすがに私があまり敬語を使わなくても良いのではないかと申し上げたことがある。このような実直なお人柄と大変な気配りによって、内外の多くの方に信頼、尊敬されておられた。アフリカ、イラン、東南アジア諸国や中国などで多くの海外研究をされた際にも、現地の人たちに常に信頼され、慕われておられたとのことである。

日本における古脊椎動物学の発展に重要な貢献をされた亀井先生を失ったことは、学界にとって大きな痛手であるが、すでに先生のご指導を受けた研究者は各地で大いに活躍されている。一同で申し上げます。先生、どうぞご心配なく、やすらかにやすみ下さい。

合掌

